

西穂に今年も登れたということ

鈴岡潤一

今年も無事に降りてこられた……。それが最近数年の実感である。体力の衰えは年を経るごとにはっきりしてきている。山荘到着までの所要時間が年々長くなっている。

なぜ、登るのだろうか。

最初に登ったのは、1980年である。恥ずかしい話だが、そのとき私は13回忌のつもりで登ったのである。実際は一年ずれている。おぼろげで、もう少し前の11回忌ころだったように記憶していたが、先日、小林俊樹先生に確かめると、そのとき先生に同行した現役生（34回）が一人居て、年次として間違いなさそうである。そのほかには当時の深志高校教員である百瀬康雄先生（23回）と、小林先生の山仲間でもある岡沢祐吉さん（4回）も一緒だった。誘われるままに翌日は西穂を越えて天狗のコルから岳沢を下り、今はなくなってしまった岳沢小屋に泊っている。奇遇はあって、その数年後に裏銀座を生徒と槍ヶ岳を目指して歩いているときに、逆コースを雲の平に向かう岡沢さんとすれ違っている。

その間は諏訪時代にもう一度登り、このときには若き斉藤金司先生（11回）と出会っている。松本に異動になってからは、この14年毎年登っていることになる。

独標とは私にとってなんだろうか。

約30年前に再訪した独標では、無性に涙が流れて、声が出ず、「祝記念祭歌」はうまく歌えなかった。自分が倒れていた独標北側の鞍部に立ち、改めて倒れた場所の幸運を思った。小口先生と岡島君の間に居てそれで済んだのは本当に奇跡的なことである、とその後にもそこに立つたびに思う。

雷撃は私の背から入り足指の爪の成長能力に損傷を与えているので、結婚後の子どもの誕生に際しても、実はひそかに「本当にまともに生まれてくれるのだろうか」と心配してもいた。だから、生まれたばかりの子どもの小さい手と華奢な指がとてもいとおしく感じられたことを鮮明に思い出せる。無事に生まれたその長男が17歳になろうとした年次の始めに、「親父と同じ歳になったから西穂に行く」と言い出したときにはとても驚き、またうれしかった。次男もそれに続いた。こうした家族たちが居ることに、また彼らが西穂をどこかで意識していることに、そして今ここにともに生きていられることに、改めて静かな感動を覚える。

思うに、独標が私を誘うのは、そこがたぶん私の第三の誕生の地だからである。その地に立つと、亡くなった彼らの顔が浮かんでくる。一緒に汗を流した柔道部の仲間や、講座が一緒によく話した君が、やはりそこに居るのである。一応は年相応に「自分らしく生きよう」というくらいの「第二の誕生」を経た（と思っている）青春時代の会話が、——会話そのものではないが、生意気だっただろう当時の我々の会話の雰囲気、いつまでも歳を取らない彼らの顔とともに、ひょいっと浮かんでくることもある。

当時、二年生になった頃の私は、存在論的に悩んでいた。クラブ活動で体を壊し、どうしたものかと、郷友会を共有しかつ同じクラブの先輩に相談したつもりだったが、彼は「クラブの存在を認めるのか、認めないのか」といった。先輩のその一言がある意味でその後の私を決めたのかもしれない。私は、「そうだ。問題は存在そのもののなのだ。」な